



# 井上 道義の 未未だった今より

春ですね。人生の早春の頃……僕は指揮者になる！と志を立てた。前回書いたように、13歳で世界の美しさに目覚め、《滝になりたい》と感じたあとです。それまで僕は、母自身がやりたいことをできなかった身代わりか、養父にチャンスは与えられていても、適当にしていただけでした。

英語や数学の個人教授、ピアノ、バスケットボール部、演劇部、ドラムたたき、ウクレレ、スキー。一番好きだったのはバレエ！でも、当時の友達には「ミッキーは目立たなかった」と言います。確かに可もなく不可もないお坊ちゃんだった。

それが、ある日一変した。羽振り（うぶり）は良いがアル中で大嫌いだった親父が「ボウズ、高校には自費で行け！」と言い放った。「義務教育は中学までだからさ」。慌てた。冷水を滝のように浴びせられた感。母いわく「正義さん

（父）の本心はあなたに授業料を出す理由を持ってこさせたいわけよ。彼は移民だった両親の崩壊した生活を支え、禁酒法時代のシカゴで怪しげなアルバイトしながら大学を首席で卒業した人よ」「えっ？ あの飲んだくれ親父が？」

それからの2カ月、勉強もせず考え続けた。100余りの可能性を書いては消しての消去法。その結論が「指揮者というものに向かって死に物狂いで挑戦する！」だった。それまでの自分の蓄積も最大限生かし、予感した長生きにも耐える目標だど。でも「指揮者という職業」に僕の性格は向いていないと今でも思う。僕は職業を選んだのではなく、自分をもっとも生かせる世界を考えた。14歳の決心だった。さて今、それを肯定できるだろうか？

（オーケストラ・アンサンブル）  
金沢音楽監督

♪  
14歳の決心